**園番号　７１０**

（様式）提出用

**平成３０年度　奈良市立高円こども園　研究実践概要**

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　園長名　　　植田　　順子

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　全園児数　　　１１１　　名

1. 研究主題

「生き生きとあそぶ子どもをめざして」

～夢中になって遊びこむための環境作りを探る～

２．研究年度　　　　２　年度

３．研究主題設定理由

昨年度、自分のしたい遊びや友だちと一緒に好きな遊びを見つけて遊ぶ子どもたちもいるが、遊びに目的が持てずじっくりと遊びこむことが苦手な子どももいる事に着目し研究を行ってきた。

今年度も昨年度に引き続きこどもが意欲的に夢中になって遊び込める環境とはなにかをより深く研究したいと考えた。

４．具体的な研究内容

　①研究のねらい

　・子どもたち自ら夢中になって遊び込めるために、発達に即した環境構成や、援助の方

法を探っていく。

　②研究の重点

　・「楽しい」「友だちと一緒が心地良い」と感じると共に「不思議だな。どうなっているのだろう」と自ら、意欲的に遊びを捉え、「明日はこの続きをしたい」とめあてを持って主体的、意欲的に活動に取り組めるような環境のあり方を探る。

・子どもの姿やことば、友だちとの関わりを丁寧に見取り、何を面白がっているか、どうしたいのか聞き取りながら、夢中になって遊び込める保育教育士の援助の在り方を探っていく。

・職員間で連携を取りながら、具体的な取り組みを話し合い、夢中になって遊びこめる姿を共有し主題について共通理解を図る。

　③活動の方法

　　園庭や保育室の環境の見直しを図った。

1. 園庭コーナーの位置確認、遊びの為の材料を探る。
2. 年齢に応じた遊び場の確保。

【０歳児】「やってみようかな？」７月

　Ａ児は、じっと座ってしていることが多い。Ｂ児は、ずり這いで部屋の中を動いているが、すぐに抱っこを求める。Ｃ児は、四つ這いで部屋の中を動き回り活発に遊んでいるが、初めてのことはしようとしない。子どもの姿を捉え、体を十分に動かして遊べるように部屋に長い坂道やマットの山、トンネル等のコーナーを用意した。

　Ｂ児は、坂の下までは行くが保育者に抱っこを求めて登ろうとはしない。Ａ児・Ｃ児も興味を示すが、登ろうとはしない。

　保育者が毎日の遊びの中で何度も坂道を登ったり下りたり楽しそうに体を動かす遊びを繰り返した。すると、その様子を見たＣ児が嬉しそうに保育者の後を追いかけて坂道を登って行った。

　その次の日も保育者が笑顔で楽しそうに坂道を登り下りするとＡ児がゆっくりと坂道を登り始めた。その姿を見てＢ児もずり這いで坂道の下まで来た。そこから、毎日繰り返し遊ぶ中で自ら坂道を登ったりトンネルをくぐったり体を動かして遊ぶようになった。

〈考察〉

　初めてのことに不安を感じる子が多く、環境を設定してもなかなか遊ぼうとしなかったが、育児担当保育をする中で子どもとの信頼関係を築き、保育者が楽しそうに遊ぶ姿をみてやってみたいと感じられるように毎日繰り返し遊んでいった。それを積み重ねることでやってみようとするようになり、子どもの姿に変化がみられた。

【１歳児】「感触遊び」９月

　水遊びが大好きな子どもたち。ジョウロで水をかけたり、コップに水を入れたりとよく遊んでいた。その他にもいろいろな感覚を経験してもらいたいと思ったが、初めてのことには抵抗を示す子は多いので、いつも遊んでいる水遊びの横で水遊びでもその他の感覚遊びでも選べるように取り入れることにした。水遊びをしている横にタライを１つ出し、そこに高野豆腐を入れた。いつもと違う新しいものに手を伸ばさずじっと見ているＡ児とＢ児だったが、保育者が水につけてぎゅーっと絞っているのを見て、水に手をつけたりつついてみたりしながら近づいてきた。少しずつ触るところから、握ったりちぎったりするようになった。その様子を見て、他の子ども達もどんどん興味を示して触っている。新しいことに慣れるのに時間がかかるＣ児は、他の子が水の中に高野豆腐をつけて遊んでいるのを見ていた。２回目をしたときにはＣ児も最初から抵抗なく触っていた。水遊びの延長で高野豆腐を握ってたらいをこすったり、水につけてみたりとよく触って遊ぶようになった。

＜考察>

　初めてのものには抵抗を示すので、慣れたものと一緒に出した。選べる環境にあることで、子どもの興味の持ち方に合わせて子どものタイミングで触れることができた。また、２回目をしたことで、１回目は見ていたＣ児も２回目には高野豆腐に触れてみるようになった。１歳児において、知っているものと一緒に出すことで安心感を持ち、知っている保育者が遊んでいることで触ってみようと思うとわかった。また、２回目をすることで、子どもが触れられる機会や、十分に遊べる時間ができたと考える。

【2歳児】「救急隊員です」12月

ままごとコーナーで赤ちゃんの人形を近くに置き、ごちそう作りをしていたＡ児とＢ児。するとＡ児が思いついたように「大変！お熱です」と赤ちゃんを抱きかかえて言うと、まな板の上に人形を寝かせ、手で人形のお腹を押し始めた。Ｂ児はそれを見て、フライ返しを人形の脇に入れて「37度です」と言った。人形を今度は床に布団を敷いて移すと、このやりとりを見ていたＣ児が、手に持っていたブロックを人形の腕に当てて「注射でーす」と言った。その後、Ｂ児が積み木を電話に見立てて「もしもし？はい、はい」と話し始めたので、見守っていた保育者も同じ積み木を持って「もしもし、どうしましたか」と応えてみると、「救急隊員です。お熱です」と言い、Ａ児と交代で人工呼吸の真似を始めた。

＜考察＞10月にままごとの玩具をスポンジやフェルト、小さいブロックなど見立てて遊べるように変えたところ、様々なごちそうに見立てて遊ぶようになった。友達とのかかわりや言葉も増える中で、簡単なごっこ遊びを楽しむ姿も増えてきた。そして自分たちで出し入れできるところに分かりやすく置くようにしたことで、それぞれにしたい遊びをしたいときに楽しめていると思う。また保育者が見守ったり子どもたちの遊びの世界に一緒に入って遊んだりすることも子どもたちの遊びの重要な環境になっていると考える。

【３歳児】「お家つくろうー」11月

　散歩で拾ったドングリやマツボックリ、木の枝、落葉などを使ってままごと遊びを始めた子どもたち。遊ぶ中で「先生お家つくろう」という声があがり、家づくりが始まる。「何でつくろうかな？」と問いかけると「はこでつくったらいいねん」という声が聞かれ家づくりを始める。段ボールを用意すると壁をつくったり、床に敷いたりして少しずつ家をつくっていく。それを見ていた他児も興味を示し遊びが盛り上がっていった。振り返りの中で「ピンポ～ンがいるな」「お風呂もつくりたい」という子どもの声から遊びがどんどん広がっていった。

＜考察＞

様々な自然物を収集しそれを使って遊ぶことで家づくりへの意欲に繋がった。また、家づくりを通して周りの子どもへの興味関心につながり、友達と関わって遊ぶ機会になった。

【４歳児】「かいぞくごっこ」10月

運動会で海賊になって遊んだり踊ったりした経験から、園庭でも、海賊になって体を動かして遊ぶ姿が見られた。砂場では、「宝物を隠すの」「ここは海だよ」と話しながら、海に見立てて大きな穴を掘ったり、宝物に見たてた木の実を埋めたりしていた。A児は「ここは海賊の基地だよ」と今までの経験から段ボールを使いだしたり、Ｂ児は「のぞく穴（望遠鏡）」と言って、砂場にあるカップやトンネルを使って望遠鏡のように覗いたり、Ｃ児は「宝物はキラキラにしようよ」と言って用具を求めたりしていた。共に必要な素材や用具を考え用意すると「ここに段ボールつなげて、ここまで基地にしよう」「こっちにも望遠鏡つけよう」「キラキラの宝物はここにかくしとくね」と思い思いに海賊のイメージを広げていた。

＜考察＞

　運動会で、みんなで海賊のイメージを共有し同じ経験をしていたことで、遊びの中でも、友達と一緒に海賊遊びをするきっかけになった。また、素材や用具など、環境を整えておくことで、更にイメージが広がり、子ども同士で思いを伝え合って遊びを広げていく姿につながった。

【４歳児】「もっと道長くしよう」９月～11月

　春から砂場付近で、数人の男児がトイを組み立て、そこに水を流して遊ぶことを楽しんでいた。流れた水をバケツで受けたり、砂場に流したりして‘‘海“に見立て繰り返し遊ぶ姿が見られたが、遊びや友達関係に広がりが見られずにいた。2学期に入り、トイ遊びを園庭の広い場所に移動し、トイの本数を増やし、脚立、ビールケース、板、波板、ペットボトルや蓋、散歩先で見つけたドングリ、マツボックリなどを準備した。

　広い場所に移ったことで、より長くといをつなげるようになり、また色々な物を転がる遊びに変わっていった。Ａ児が「高い所から転がすと、早く転がるな」と友達に知らせたことから、脚立やビールケースを使って、トイの組み立てに高低をつけたり、友達同士で「このトイどこにつなげよう？」と話し合ったり、「そっち落ちないように持ってて」と協力する姿が見られた。

＜考察＞

　長いトイや重さのある台などを子どもたちが自由に扱うことへの不安から、遊びに保育者が入り込みすぎてしまう時ほど遊びが発展しづらいことに気付いた。適度な距離をもちながら遊びを見守ることで、子ども達同士で協力したり、気付いたりすることが増えていった。また、遊びの場所や道具を見直し準備したことで、遊びがより広がり日々発展が見られた。

【５歳児】「友達と一緒に段ボールの部屋・家づくり」10月

6月に段ボールで自分の部屋・家づくりが始まる。ベッドやテレビなどをつくって布テープで貼り合わせて思い思いに遊ぶ。プール遊びや色水遊びなどの水遊びが始まると、一度遊びが終息するが、運動会が終わると、園庭で再び遊びが始まる。今度はつくった部屋・家どうしを友達とつなげ合わせたり、話し合って新たな部屋・家をつくり始めたりする。屋根や冷蔵庫、玄関、テーブルなどの家具にもこだわりだす。「００ちゃんここをもってて。私はここを貼るから」「冷蔵庫、冷たいわ」「ジュースいっぱい冷やしとこう」などと話し、楽しんでいる。つくった部屋・家の中で、ごちそうをつくったり遊びに必要なものをつくったりする姿も見られる中で、こども

たちが集まって話し合い、ケーキ屋さん、アクセサリーやさん、カバンやさんをしようということにまとまり、お店屋さんごっこへと発展していく。

＜考察＞

　6月は自分だけの部屋・家づくりだったものが、10月には自分のものを一通りつくったあと、友達のつくる様子を見てひらめき、友達と共有の部屋・家をつくりたいという考えがうかび、友達同士で思いが合わさっていったと考える。

　また、遊びが広がっていってほしいという保育者の意図で、遊ぶ場所を保育室から園庭へと変え、近くにさまざまな素材をこどもが自分で選び出しやすいよう、棚等に整理して設置しておいた。自分で必要なものを選び出すことで、新たなものをつくり出すイメージが広がり、つくる楽しさを味わいながら、友達と互いの思いや考えを出し合って活動を進める協同した遊びへと発展していくのではないかと考えた。

【長時間保育】 「ブランコの水たまり」11月

　雨の降った次の日、おやつの後園庭に出るとブランコの下に水たまりが出来ていた。

4歳児が、ブランコに乗ろうとするが足が濡れるので諦めかけていると、5歳児がバケツとスコップを持って来て、水をすくって捨てていた。それを見て4歳児、5歳児の友達が集まってきて同じように水をすくい始めた。「こっちのスコップの方がいっぱいすくえるよ」「バケツの水がいっぱいになったから捨ててきたら」などと話し「あっちもしてくるわ」と協力しながら3か所の水たまりをきれいにした。水がなくなると「もう乗れるなぁ」と満足気な表情をして、その後交代でブランコ遊びを楽しんでいた。

＜考察＞

　5歳児が自分の経験から水をすくってブランコに乗ろうとした。他児もそれを見て一緒にする姿があり、異年齢児の関わりの中で思いやりや協力する姿が育ってきた。

５．研究の成果

研究主題を進めるにあたり、乳児クラス、幼児クラスに分かれて話し合いを進めていき、

毎月振り返りをしながら保育を確認していくことができた。

　乳児クラスでは、安心できる保育者との信頼関係を築くことで、周りの環境に自ら働きかける意欲の土台作りをすることと、発達や興味関心に合わせた環境を準備して遊びの楽しさに共感することの二点を大切にした。結果、環境が変わる事に不安そうにしていた子どもたちが、取り組みを積み重ねることで意欲的になり新しい遊びを取り入れると興味を持ってやってみようとするようになった。

幼児クラスでは、各クラスの保育室での環境設定だけでなく、園庭の各コーナーの見直しを行った。保育者は試行錯誤しながらコーナーの場所や、遊びに使う用具の位置関係も考え保育していった。結果、子どもたちは一年を通して色々試したり、友達と一緒に遊びを進めたりするようになってきた。

６．今後の課題

○乳児クラス・幼児クラスに分かれて進めていったが、今後より深くテーマについて考えるために、園全体の取り組みとして保育者全員で気付いた事を話し合い、考察を重ねながら進めていく必要がある。

○環境づくりという点では一定の成果があったと思われるが、子どもをみとり、子どもと一緒に環境に関わって遊びを共有し、子どもの遊びがスムーズに楽しめたり広がったりする手立てを模索する必要がある。

○保育者は子どもの姿に寄り添い、自ら考えたり判断したりできる環境を継続的に見直すことで、生き生きと遊ぶ子どもの育成を目指していきたい。